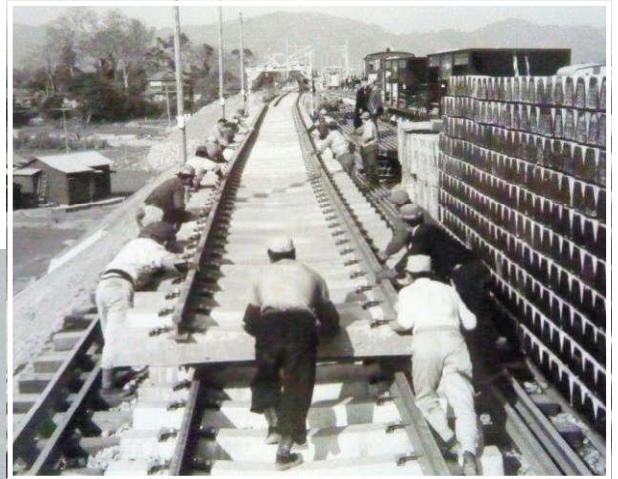
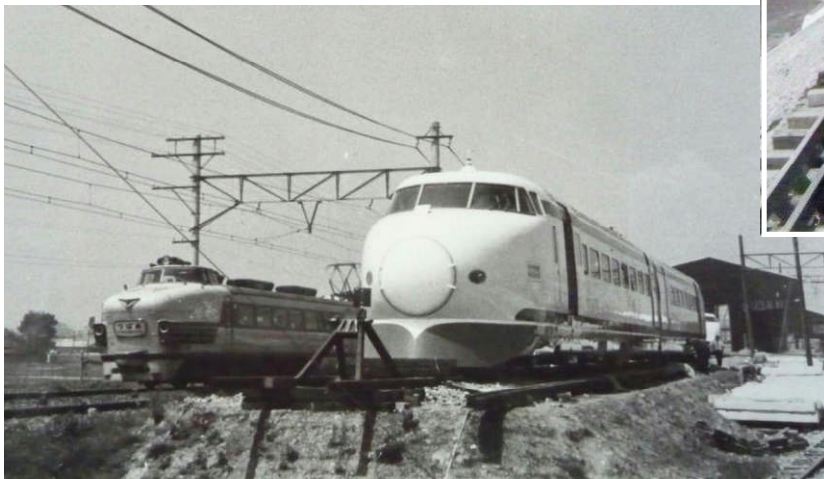


新幹線の試作車両の横を通過する東海道線「特急つばめ」



鴨宮における広軌軌道の敷設作業

50年前の新幹線

～図書館所蔵写真から～

「夢の超特急」と呼ばれた東海道新幹線は、アジアで最初のオリンピック、すなわち東京オリンピックの開催にあわせて、昭和39年(1964)10月1日に開業します。現在から48年前のことです。

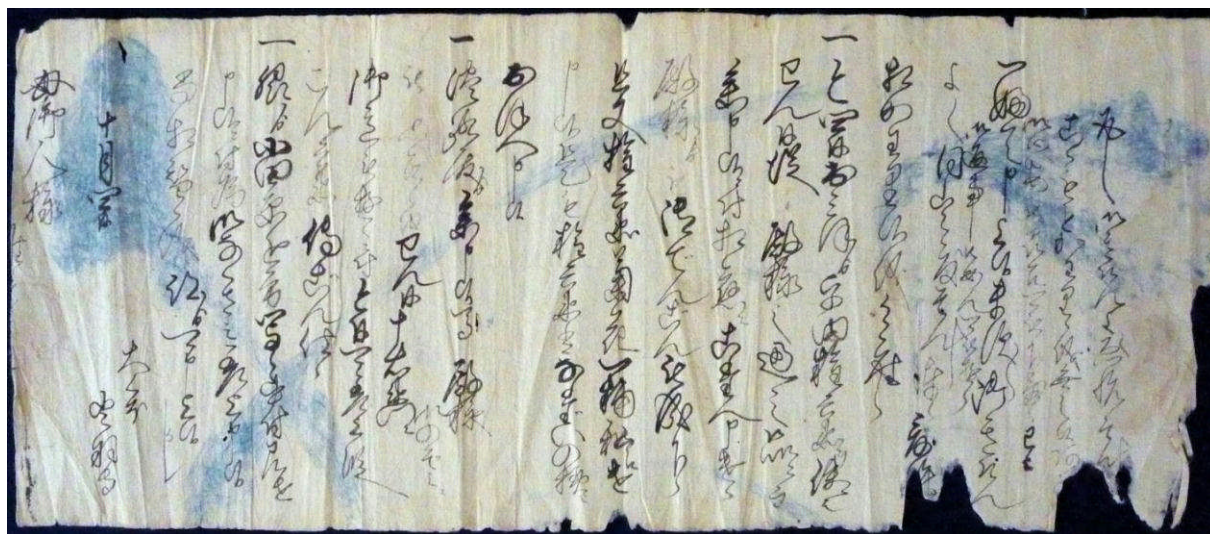
しかし、小田原ではそれより2年前の昭和37年(1962)6月、新幹線の試作車両が鴨宮(小田原市)から試運転を開始しています。これは広軌(1,435mm)の線路を用いた新幹線での最初の運転にあたり、今年、それからちょうど50年が経ったこととなります。

東海道新幹線は東京オリンピックとともに、アジアのなかで他国に先駆けた日本の高度経済成長を物語る象徴の1つであったといえます。東京～新大阪間約515kmの線路の敷設と並行しながら、実質5年間の短期実現に向けて安全で快適な新型車両の開発のみならず、さまざまな技術の実地試験の場が必要とされました。そこで選ばれたのが鴨宮～綾瀬(神奈川県綾瀬市)間で、鴨宮に管理基地が置かれたことから、鴨宮モデル線区と呼ばれています。

走行試験では走行スピードのアップはもちろんのこと、時速200kmを越える高速走行における安全性を確保するために、ATC(自動列車制御装置)やCTC(列車集中制御装置)をはじめとする最新技術システムの開発・試験が行われました。昭和38年4月以降、モデル線および試作車両を利用して、沿線住民・児童生徒や公募による一般の方を対象とする試乗が始まります。一般試乗者数は10万人とも15万人ともいわれ、新幹線の必要性を多くの市民に理解していただく上で大きな役割を果たしました。

殿様の息子から母親への手紙

～収蔵資料の紹介～



平田幸子氏寄贈資料 No.25 書状

平成21年(2009)に当館に寄贈された平田家文書から、殿様の息子が母親にあてた手紙を紹介します。文頭の「一筆申し上げ候、ますます御機嫌よく目出度く存じ奉り候、爰許相変わり候儀ござ無く候」は、大久保出羽守が江戸を離れ、「爰許(小田原)」にいることを示しております。江戸の妹お美保から平田権兵衛を使いにして、殿様と出羽守に「通いの品(手紙)」が届いたので、殿様の伝言と「相応の応え(妹への返事)」を権兵衛に申し遣わしたと報告しています。出羽守同様に、殿様も小田原に帰城していたことがわかります。

享保9年(1724)の小田原藩順席帳(『小田原市史』史料編近世I)によれば、平田権兵衛は大寄合御役人並席の家臣で60石取、実名清孝、61歳とあります。出羽守に「菊花一桶」を持参しており、華道では「名代(評判)」の家臣だったようです。「淡路殿」から出羽守がいただいた馬を、殿様が所望していると家老山本十右衛門がいうので差し上げることにしたと、「母御人」に伝えております。

さて、この出羽守は誰のことか。小田原藩主大久保家で出羽守の官名をを名乗ったことのある人物は2人おります。大久保忠興と幕府老中として活躍した大久保忠真ですが、この手紙の主は忠興(当時忠数)で、殿様は大久保忠方(当時忠郁)となります。ともに小田原にあったのは享保14年(1729)のことで、忠興が塔ノ沢(箱根町)での湯治を理由に、同年9～10月にはじめて小田原を訪れております。母親は、忠方正室のお幾(中納言野宮定基娘・柳沢吉保養女、のち了真院)になります。

「脇(お供の者)」が小田原近辺の様子を書き留めたものがありますので「御慰み」に、と江戸へ届けており、母親を気遣う気持ちが伝わります。忠興は16歳でしたが、まだ「前髪」姿の童形でありました。ただし、すでに婚約者がおりました。手紙に見える「淡路殿」とは元徳島藩主蜂須賀綱矩のことで、将軍徳川吉宗の許可を得て、その娘と忠興は婚約中でした。

小田原市立図書館地域資料室 利用案内

小田原市立図書館(星崎記念館)2階

年中無休(第4月曜の特別整理日、年末年始を除く)

資料の出納・ご相談は9時～12時、13時～16時45分に承ります

室内の資料は原則貸し出しいたしません

*貴重資料の閲覧：事前の閲覧申請・ご予約をお願いいたします

【編集後記】

地域資料室前にて、写真展示「新幹線が小田原を走ってから50年!」を始めました。図書館にお越しの際には、ぜひご覧ください。